

天空の草原のナンサ (The Cave of the Yellow Dog)

2005(平成17)年12月12日鑑賞(東宝試写室)



監督・脚本=ジャンバスレン・ダバー/出演=ナンサル・パットチュルーン/ウルジンドルジ・パットチュルーン/バヤンドラム・ダラムダッディ・パットチュルーン/ツェレンプンツァグ・イシ/ナンサルマー・パットチュルーン/バトバヤー・パットチュルーン/ツォーホル(東芝エンタテインメント配給/2005年ドイツ映画/93分)

……モンゴル人の女性監督が、『らくだの涙』(03年)に続いて贈る、心暖まる家族の物語。舞台は美しいモンゴルの草原、登場人物は6歳の長女ナンサたち一家5人、プラス1匹の犬。最近のハデハデしいハリウッド映画と対照的なドキュメンタリー風の淡々としたストーリーだが、たまにはこんな映画で心を洗ってみることが必要かも……？

舞台は？ 主人公は？ そして一体何の映画？

この映画はドイツ映画だが、モンゴル人の女性監督ジャンバスレン・ダバーが、現実にモンゴルの草原で生活している1つの家族を探し出し、その生活を淡々と描いたもの。したがって、その邦題どおり舞台はモンゴルの草原で、主人公は6歳になる長女のナンサ。そして登場人物は、ナンサの両親と妹・弟という家族5人、プラス1匹のツォーホルという犬。

ラスト近くになってちょっとしたハプニングが発生し、映画らしい物語(?)が登場するが、全編を通じてほぼ90%はドキュメンタリー風の映画。私は物語性の薄い、ドキュメント映画はあまり好きではないが、たまにはこんなノンビリとした美しい映画を観て、気分転換をすることが必要かも……？

モンゴルの草原はおだやか……？

モンゴルといえば、日本では大相撲の世界に朝青龍が登場してくるまでは、元寇しか知らなかった人が多かったのでは……？ 今、モンゴルも急激な近代化の

波にさらされているが、この映画を観ている限り、モンゴルの草原ではそんなことは全く無関係な穏やかな生活が展開されているようにも感じられる。しかしこの映画の中でも、大人の男たちの会話の中で語られている、草原からどんどん人間が少なくなっている話や、ラスト近くに登場する国政選挙への参加を呼びかける宣伝カーなど、実は草原にも変革の波が押し寄せていることがわかる。そんな時代状況であるからこそ、ジャンバスレン・ダバー監督は、今なお美しい草原の中でたくましく生活しているこんな家族の姿を世界にアピールしたかったのでは……？

ゲルと耐震強度偽装問題……

草原のモンゴル人たちは「ゲル」と呼ばれる移動式テントで生活していることはよく知られているが、それが具体的にどんなものかはわれわれ日本人は全く知らないはず。しかしこの映画の中で描かれるゲルの解体作業を観ていると、その構造が実によくわかる。今日本では、耐震強度偽装問題が大問題となっているが、これは、要するに複雑な図面や数字があるから、そしてまたそれを他人に売りつけて利益を得ようとしている人がいるから生まれたもの。しかしこんな簡単なゲルであれば、そしてまた自分たち家族が生活するためのテントであれば、強度を偽装する必要など全くないもの……。

その他いっぱいお勉強も……

「百聞は一見に如かず」とはよく言ったもので、スクリーンを通して観るものであっても、前述のゲルの構造のみならず、家畜の放牧の仕方、ヤギの乳しぼりの仕方、チーズのような食料品の保存の仕方、さらに家族や家畜その他全財産を率いた一家総移動の仕方など、草原に住むモンゴル人たちの生活ぶりが実によくわかる。日本では100円ショップでいくらでも売っている1本のひしゃくを夫がまちで買ってきてくれたことに喜んでいる妻の姿を観るのは、何とも感動的……。この映画からお勉強できることはいっぱい……。

パルムドッグ賞ってホント……？

世界3大映画祭の1つであるカンヌ国際映画祭には、犬の演技によって受賞作

が選ばれるパルムドッグ賞があるとのこと。もちろんこれは、カンヌ映画祭の最高賞のパルムドール賞をもじったものだが、それってあまりにもできすぎたパロディでは……？

そこで、インターネットでこれを調べてみると、「THE PALM DOG AWARD」は、2001年からスタートした非公式のAwardとのこと。そして何と、2005年には「犬の出演する映画が多く、選ぶのに苦労した」中で、この映画のツォーホル君が選ばれたということだ。ちなみに私の大好きなニコール・キッドマン主演の『ドッグヴィル』（03年）に登場したワンちゃんも過去の受賞犬だとか……。やっぱりヨーロッパ人は、ユーモアのセンスが高いのかも……？

自然の演技が1番……

この映画に登場するナンサを中心とする5人の家族は、もちろんカメラの前で演技をした経験など1度もないもの。それはパルムドッグ賞を受賞したツォーホルだって同じ。ところが、2004年7月～8月の2カ月間にわたる共同生活の中で撮影されたというこの映画では、子供たちや犬の姿はもちろん、両親たちの演技も自然そのもの。これらの撮影の様子はパンフレットに詳しいし、エンドロールが流れる中でも少し紹介される。映画は所詮つくりものだが、やっぱりつくりものであっても、自然の演技が1番……。

The Cave of the Yellow Dog と輪廻転生思想

この映画をホントに理解するためには、迷子になったナンサを暖かく迎えた老婆が語る「The Cave of the Yellow Dog」（黄色い犬の伝説）のお話を理解することが必要。さらに、映画の冒頭に死んだ犬を埋葬するシーンで登場する、「どうしてしっぽを犬の頭の下に置くの？」というナンサの質問に対する父親の回答の意味することの理解も重要。なぜなら、これこそがモンゴルの輪廻転生思想を物語るものだから……。この2つについては、映画を観て、パンフレットを読んで、しっかりと勉強を……。

2005(平成17)年12月14日記